

Title	Nicholas Reynolds, Beck. Gehorsam und Widerstand, übers. von Einsiedel und Schulte
Sub Title	
Author	原, 信芳(Hara, Nobuyoshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.4 (1982. 3) ,p.117(541)- 122(546)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0117">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0117</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

Nicholas Reynolds, *Beck. Gehorsam und Widerstand*, übers. von Einsiedel und Schulte, Wiesbaden/München 1977.

原 信 芳

ルトヴィヒ・ベックは第三帝国初代の参謀総長として、また軍部における反ナチ派の中心として著名な人物である。本書はもともと、著者レイノルズ (Swarthmore College, Trinity College, Oxford 出身) がホイラー・ベネット John Wheeler-Bennett の指導を受けて執筆した学位論文であり、原著は英語であるが (*Treason was no Crime*, London, 1976) 拙稿は表題独語版によった。

本書に先行するベックの伝記的研究としては、フェルスター Wolfgang Foerster の *Generaloberst Ludwig Beck. Sein Kampf gegen den Krieg*, München 1953. ヴンペントント Gert Buchheit の *Ludwig Beck. ein preussischer General*, München 1964. の二つがある。この他ロートフェルス・リッター・シュラーにも抵抗運動との関連でベックに言及している。

批評と紹介

西独史家のベック評は概して高く、ベックの国家観や政治思想の権威主義的保守主義的、反民主主義的性格を指摘したミュラー Klaus J. Müller の „Staat und Politik im Denken Ludwig Becks“ in: *Historische Zeitschrift* Bd. 215 H. 3 (1972) など一部を除いて、ヒトラーと対立するベックの冷静な判断力や倫理感をやや理想化しすぎた傾きがある (ブッフハイトについて私は未見であるが、レイノルズによれば彼も基本的にはフェルスターのベック像を受け継いでいるという)。我国では、故寺阪精二氏の「ルトヴィヒ・ベックの反戦努力の一考察」(『史学雑誌』六六一、一九五七年)、同じく、「ドイツ抵抗運動の思想的―基盤」(『史学研究』八九、一九六三年) があるが、氏はどちらかと言えばフェルスターに近く、ベックの理性的・倫理的態度を尊重しているようである。

これに対して著者レイノルズは、ベックの国家社会主義への共感を指摘し、彼とヒトラーとの対立を道徳や倫理のレベルで規定することに反対する。拙稿は以上のようなベック像の相違を踏まえて、レイノルズの表題著書について、その内容を紹介するとともに若干の批評を試みるものである。

- 尚、本書の構成は以下の通りである。
- I Die Jahre von 1880 bis 1918
  - II Die Reichswehr
  - III Die Innere Krise des Dritten Reiches
  - IV Außenpolitik

- V Die Fritsch-Krise
  - VI Die Sudetenkrise
  - VII Zwischenspiel
  - VIII Verchwörung 1939 und 1940
  - IX Verschwörung im totalen Krieg
  - X Der 20. Juli 1944
- (註、文献リスト等合わせて二八四頁)

第一章はベックの生い立ちから始まり、彼が帝制陸軍の参謀将校として第一次大戦の敗北を経験するまでの言わば序章にあたる部分である。第二章は共和国時代のベックについて、彼の国家社会主義への共感を中心に論じられる。一、二章を通じてベックの政治的立場と国家観が明らかにされ、後の彼のナチスに対する支持と対立とを理解するための前提がここで示唆されている。

第三章以下が本書の本論である。三、四章はベックが基本的にヒトラーと協調していた一九三三—三七年までを扱い、彼のナチスに対する親和性がどこにあったのかがテーマとなる。五、六章ではベックが次第にヒトラーから離れていく経過が説明され、第八章以下では抵抗運動に転じたベックと彼の同志達の反ナチ活動が考察される。この間に第七章が挿入され、ここではベックの書いた論文に基づいて政治と軍事とのかかり合いに関する彼の態度が明示される。そしてそれはベックの反ナチ運動の思想的伏線となるのである。

ベックは第一次大戦の敗北に際しては戦況をリアルに把握して

いたが、ホーエンツォレルン朝への忠誠心の故に帝制崩壊には大きな衝撃を受けた。君主主義者で政党政治に不信感を持つベックは、新しく生まれた共和国に敵対的で、再軍備と大ドイツの復興を欲していた。それ故ベックは国家社会主義に期待するところ大きく、ヒトラー内閣の成立を歓迎したのである。

ベックは大統領と閣内の伝統的保守派がヒトラーやナチス党を制禦できると考えていたし、再軍備はベック達にとっても望むところであったから、ヒトラーの政権掌握後しばらくはベックとヒトラーとの関係は良好であった。またベックの「外政優位」の姿勢は、しばしば内政領域におけるナチスの蛮行に目をつぶらせてしまった。シュライヘル、ブレドウ両將軍の暗殺やユダヤ人問題、フリッツユ事件等に対するベックの消極的態度はこのためである、と著者は指摘している。

このようなわけで、ベックのヒトラー批判はまず外政面から始まった。彼はヒトラーの冒険政策がドイツを全く勝ち目がないと彼が考える第二の世界大戦に巻き込むことを恐れたのである。ベックの対外目標は中部ヨーロッパにドイツの覇権を樹立することとあり、しかも彼は英国がこれを容認してくれることを期待していた。ズデーテン危機において、ベックは一連の覚書を作成してヒトラーを批判したが、その要旨は対チェコ戦が必然的に英仏ソを相手とする大戦争に発展し、かかる大戦争になった場合ドイツの勝利の見通しは全くない故に対チェコ武力介入に反対する、というものであり、対チェコ戦そのものはベックにおいても否定されていない。しかし、ヒトラーはベックの意見に耳を貸さ

ず、進退窮した彼は一九三八年八月、陸軍参謀総長の職を辞した。

ベックは辞任後、戦略論の研究に従った。戦争を政治的対決の一要素とみなす彼の所説は、軍人として一応理性的とみえるが、ベックの研究のテーマは、いかにして平和を保つかではなく、いかにして戦争を準備するかであった。ヒトラーの非合理性と予測のなさが彼を不安にした。

第二次大戦の開始とともにベックは、積極的に抵抗運動にコミットし、ゲルデラー C. Goerdeler やハッセル U. v. Hassellら民間人とも協力しナチスを倒した後の体制プランを練るが、彼らの政治構想は決して民主的なものではなかった。ベックは君主制の復活と、ナチス支配下に一層の混乱をみせていた軍部の統帥関係を陸軍参謀本部の優位において統一することを望んでいたのである。

ところで著者は、ベックは抵抗運動に従事するうちに精神的に成長した、という。七月二〇日のクーデターの直前に書かれた論文では、フォッシュのナポレオン批判を支持しつつ、ベックは攻撃的戦争を退け近隣諸国民との宥和を考えるようになっていた。即ちベックは、「保守的なプロイセンの将軍から穩健なヨーロッパ的政治家へ」と成熟したというのである。また著者はベックがヒトラーの支配体制に協力してきた責任は追求しながらも、彼の国家や国民に対する責任感、ヒトラー打倒の決意に一定の評価を与えることには吝かでない。ベックは一九一八年以降の将校団の役割と自己の行為に深く反省するところがあり、抵抗運動に献身

する意志を固めた。彼はプロイセン法治国家の再建と中欧における覇権大国としてのドイツの地位保全のために、むしろヒトラーを排除する必要があるとの結論に達したのであるが、成否の不確実な蜂起へと彼を促したものは最終的にはベックの罪の意識であった。

一九四四年七月二〇日の反ナチ・プロットは、シュタウフェンベルク C. v. Stauffenberg シュテュルプナーゲル K. H. v. Stülpnagelらの一部高級将校の努力にもかかわらず、陸軍の反ナチ大動員に失敗し、ナチス側の迅速な対抗措置もあって半日で鎮圧された。同日の直夜中、ベックはベルリンの国防省内で自殺した。

\* \* \* \* \*  
以上が本書のおおよその内容紹介である。

さて、これまでのベックの反ナチ運動についての評価は、彼の抵抗運動の思想と行動の根底に深い倫理的要請を認めて、これを高く評価するフェルスター (Wolfgang Foerster, *Generaloberst Ludwig Beck, München 1953, S. 164*) と、ベックは戦争そのものに反対したわけではないとして、彼の抵抗運動の純粹さを否定するネーミア (Lewis Namier, *In the Nazi Era, London, 1952, P. 26f.*) とに二大別することができよう。

レイノルズもベックの戦争反対は、ドイツの戦争準備の不足、経済力の弱さ、国際情勢等に関する彼の客観的で冷静な認識によるものであるとみている。さらに著者はベックの覚書等を分析して、そこには大ドイツ建設のための侵略的性格、好戦的性格さえ

存在することを指摘した。ヒトラーとの対立においてベックの倫理的確信を強調するフェルスター、ロートフェルス、リッター、ツェラーらに対して、レイノルズはベックの保守的ドイツ・ナシヨナリストとしての観念、あるいは参謀将校としてのリアルな情況分析と判断力に力点を置く。そしてベックといえどもヒトラーの支配体制に協力していた責任は免れない、という。

しかし、だからといって著者は、ベックの抵抗運動における道徳的要素を全く否定しているわけではない。例えば、著者によれば、フリッチュ事件は名誉の問題だっただけにベックに大きなショックを与え、戦略上の対立とともに彼がヒトラーから離反していくきっかけとなったのである。ベックが単なる軍事の専門家、シユパイデルの所謂、*Nur Soldaten* (Hans Speidel, *Invasion 1944*, Frankfurt/M 1975, S. 18.) とは異なり国家に対して深い責任感を持っていたことは、フェルスターのみならずレイノルズもまた容認するところである。従って著者は、従来の西独のベック研究よりも明瞭に、反議会制民主主義者故の彼の国家社会主義へのイデオロギー的共感を指摘したとはいえ、ヒトラーもベックも、換言すればナチスも参謀本部も選ぶところなしとするネーミアとは些か立場を異にしていると思われる。そのような意味で、著者のベック観はホイラー・ベネットのそれを (John Wheeler-Bennett, *The Nemesis of Power*, London, reprinted 1980, P. 391, P. 659f.) 発展させたものと考えられる。

また対外政策に関しては、チェコのドイツ人居住地域とオーストリアを併合して大ドイツを建設することは、ベック自身も望ん

でいたことである、と著者はいう。にもかかわらず彼がヒトラーの政策を批判し、これに掣肘を加えようとしたのは、二度目の世界大戦を恐れたためだというのである。一方著者はベックの戦略が、ヒトラーの戦争計画に較べてより限定的性格を持っていたとの指摘も忘れない。即ち、ベックはロシアの犠牲によって東方に大領土を得ることは非現実的として退けたのである。このような言わば限定的膨脹主義を、ゼークト、シュトレゼマン、ブリュンニクからワイマール共和国におけるドイツ支配勢力の現実派ともいうべき人々の政策目標との継続の上で理解していることも本書の特徴の一つであろう。

最後に本書に対して若干の問題点の指摘と注文を加えるとともに、今後のベック研究の課題について一言触れておきたい。

フェルスターらの見解では、ベックは参謀総長時代からナチスに敵対していたとされるが、レイノルズは在職中のベックは基本的に体制に協力的であったとして、参謀総長としてのベックと抵抗運動者としてのベックとを区別して考えている。そこで、ベックの精神的成長を指摘することになったのであろうが、果して抵抗運動において「保守的なプロインの將軍から穩健なヨーロッパ的政治家へ」と言う程の飛躍がベックにおこったのであろうか。おこったと言いつけるには、このベックの態度の変化について、著者は必ずしも十分には読者を説得しているとは言えないように思われる。

ヴァイルヘルム時代からワイマール共和国を通じて国家中の国家としての地位を保ってきたドイツ軍部が、共和国の崩壊とヒトラ

一の政權掌握に一定の役割を果たしたことは、既に研究者の間でも常識になっている。彼らの議會制民主主義に対する拒否的態度は、確かにヒトラー政權の成立にプラスの方向に作用した。しかし国家社会主義体制にとっては、例え反民主主義的なものであっても、国家中の国家という如き存在は快いものであるはずがない。従ってベックは、ドイツ參謀本部の伝統に忠実だったが故に、あるレベルまではヒトラーと協調できたが、その妥協の範圍をヒトラーが越えてしまうと、ベックもまた体制にとって障害物とならざるを得なかったのではないだろうか。ベックの国家觀や政治思想は、抵抗運動に赴いてからも変化はなく、彼のナチスへの共感と離反・抵抗をこの一貫性によって同時に説明する可能性も成り立ち得るとの指摘はしておきたい (Klaus J. Müller, „Staat und Politik im Denken Ludwig Becks“, in: *Historische Zeitschrift* Bd. 215 H. 3, 1972, S. 631.)。

ところで、本書を評した一研究者は、レイノルズはベックの行動の動機を分析するのに個人主義的心理主義的分析方法をとっているので、ベックの社会的連関を明らかにすることには成功してゐない、と批判してゐる (Conny Stamm, „Nicholas Reynolds, Beck-Gehorsam und Widerstand“, in: *Historische Zeitschrift* Bd. 227 H. 3, 1978, S. 730f.)。なる程著者は、ベックのヒトラーからの離反に関しては、戦略上の対立を根底にすえて合理的に説明したのに比して、七月二〇日事件へと向うベックの意志の決定については、彼の国家に対する責任感、反省、贖罪の意識等を重視している。しかしレイノルズは、ドイツ軍部の歴

史やベックをとりまいていた第三帝國下の諸情況をよく知った上で本書を書いたものと思われ、ベックという一個人をとりあげたとはいうものの、社会制度や社会集団への参照を怠ったわけではない。むしろそれらを考慮にいれた上で、必ずしも成功の見込のない蜂起に敢えて一身を賭けるベックの最終的な意志の決定を彼の精神に求めたのであろう。七月二〇日のクーデターへとベックを決起させたものは、參謀総長時代の彼の行動よりも一層内面的であるだけに、今後とも困難な研究課題となるであろう。

以上のような問題点や課題は残したもののフェルスターがベックの道徳的信条や無謀な戦争計画に反対する理性的で慎重な態度を強調し、その陰に隠された侵略性、好戦性に寛大で、ベックに好意的すぎる叙述をしているのに較べて、レイノルズは、中歐にドイツの覇權を確立するという大ドイツ主義的見解の故に、ヒトラーの対外政策に対する親和性とその冒險的性格についての憂慮やナチスの犯罪的行為に対する嫌悪との間で揺れるベックの動揺の振幅を描いて見事である。またフェルスターがベックの遺した覚書類を無批判に使用し、史料閲覧の範圍も狭いのに対して、著者はドイツのみならず英米の各種文書館、図書館を利用して、フェルスターの用いなかったベックの私的な文書も豊富に使っている。こうして著者は、ルトヴィヒ・ベックの実像に一層近づき得たと言うべきであろう。

(追記) 私は未見であるが、一九八〇年、西ドイツで、K. J. ミュラーの手に成る新しいベック伝が出版されたそうである。ミ

ユラーはこの本の中で、ベックをフェルスターらの神話から解放することを意図し、ベックの弱さや矛盾を強調している由である（中沢護人、「K・J・ミュラー著・將軍ルードウィヒ・ベック」、『思想の科学』一九八一年第六号）。

執筆者紹介

高瀬弘一郎 慶応義塾大学文学部教授

坂井 達朗 慶応義塾大学文学部助教授

戸沢 行夫 東京歯科大学（教養課程）助教授

清水 潤三 慶応義塾大学文学部教授

原 信芳 慶応義塾大学大学院博士課程